



あだち・としこ
1986年、東京医科歯科大学歯学部附属歯科衛生士学校卒業。同年4月から東京医科歯科大学歯学部附属病院に歯科衛生士として勤務。2009年、歯科衛生保健部発足に合わせ、歯科衛生保健部長に就任。

足達淑子

歯科衛生保健部部長

組織を動かすのは人。
医科歯科大の歯科衛生士として
胸を張って働く人材を育てる

近年、全身の健康やフレイルなど、さまざまな観点から注目を集める口腔ケア。口腔保健衛生の専門家である歯科衛生士の活躍の場も広がる中、歯学部附属病院歯科衛生保健部のトップとして歯科衛生士の育成や資質向上に力を注いでいるのが、足達淑子部長です。

国内の病院では唯一の 部長を務める歯科衛生士

「歯科衛生士が単独の部」として活動している病院は国内では珍しく、部長職に就いている歯科衛生士も、全国で私だけなんです。歯科衛生士が責任を持って自らの職務に当たり、処置の記録も自分たちで書いてきた伝統があ

る医科歯科大だからこそ、実現した体制だと思っています」

そう語るのには、歯科衛生保健部発足当初から部を束ねる足達淑子部長。同部の32名の歯科衛生士は、外科系を除くあらゆる診療科・専門外来に配属され、特に口腔ケア外来では、歯科衛生士が主体となり、歯科医師と連携して保健指導や処置に当たっています。また、最近では医学部附属病院で周術期口腔機能管理も行っています。

「患者の社会的立場や家庭環境も考慮し、先生方とは異なる角度からの意見を伝え、しっかりとディスカッションをしていくところに口腔ケア外来のやりがいを感じます。私が35年前に入職した時は、歯科衛生士はたった6名。一部の科での診療室の管理業務が中心でした。あの頃のことを思うと、今が嘘みたいですね」

仕事の魅力は人との関わり 患者の声に耳を傾ける

足達部長は、長年にわたり、口腔ケアのプロとして患者と向き合い、歯科衛生士の活動の場を広げることに力を尽くしてきました。

「口は、呼吸や食事だけでなく、会話や感情表現にも欠かせない重要な器官です。その口を衛^{まも}るのが歯科衛生士の仕事。最近、口腔ケアと全身の疾患やフレイルの関係に社会的な関心が高まっていますが、東京医科歯科大学では、以前から嘔むことや滑舌にも注目して治療を行ってきました。先生方と取り組んできたことが、ようやく社会にも広がってきたと感じています」

多忙な部長職にあっても、臨床で患者と関わる時間を欠かすことのない足達部長。患者と接するときには、常に患者の生の声に耳を傾けます。その原点は、歯科衛生士学校での学外実習やフィールドワークにありました。

「患者さんの行動変容を促すためには、こちらが教えたり伝えたりする前に、まず患者さんの意見を聞き、対話をするのが不

可欠です。学生時代、保健所、保育園、企業内診療所などいろいろな場所でも実習を経験し、先輩方が上手に歯科の情報を伝えていた姿に感銘を受けました。岩手県でのフィールドワークでも、地域の方へのアンケート調査を通じて、先入観や思い込みは失敗のもとだと気付くことができました。人と関わる歯科衛生士の仕事の魅力と基本を学んだことが、今に繋がっていると思います」

また、キャリアの中で最も長く携わってきたのが、障害者歯科です。約20年前から関わっている都内の特別支援学校では、歯磨きなどの保健指導にとどまらず、摂食を含めた幅広い指導に取り組んでいます。

「障害がある子ども、幼稚園から高校を卒業するまでしっかりと保健指導を続けると、きれいに歯磨きができるようになります。生徒たちは、口がきれいになったことで就職もしやすくなったそうです。教員の方に『虫歯にならない方がいい、というだけではいいですね』と言っていたいた時には、私たちの思いが伝わったことととてもうれしかったですね」

生き生きと働ける職場を 次の世代につなごう

足達部長は、部長に就任する際、「人材育成」を目標に掲げました。看護部などを参考に、スタッフと試行錯誤を重ねてマニュアルやカリキュラムを作り、新人教育やキャリア支援の仕組みも整えています。さらに、東京医科歯科大学にとどまらず、全国の大学病院に勤務する歯科衛生士全体の資質向上のため、備えるべき要件の整備などにも携わっています。

「組織は人がいなければ動きません。医科歯科大の歯科衛生士として、胸を張って働く人材を育てることが目標です。当部のスタッフはよく『楽しそうに働いているね』と言っていた

だきますが、これからも全員が生き生きと働ける職場をつくっていきたい。そして、その職場を後輩にしっかりとつないでいくことが、部長としての私の責務だと思っています」



退職者を送る会での部員との集合写真